

領土・主権展示館企画展



おがさわらじましんけいす
「小笠原島真景図」



「マーラン船」

べざいせん
「弁才船(模型)」

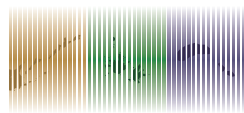


「大黒屋光太夫と磯吉」

漂流者たちと 日本の領土の歴史

2022 3/8 火 — 5/8 日

日本の島々をめぐる
苦難と発見と交流の物語



領土・主権展示館

NATIONAL MUSEUM OF
TERRITORY AND SOVEREIGNTY

左上:「西 12月19日初見小笠原島國」宮本元道「小笠原島真景圖」(国立国会図書館所蔵)(パネル・映像展示) / 右上:「琉球船の國」(沖縄県立博物館・美術館所蔵)(パネル展示) / 左下:船船模型 弁才船(船の科学館所蔵) / 右下:「大黒屋光太夫と磯吉」桂川甫周(国瑞)「吹上様普請民御覽之記」(北海道大学附属図書館所蔵)(パネル展示)

ごあいさつ

このたび領土・主権展示館は、企画展「漂流者たちと日本の領土の歴史 日本の島々をめぐる苦難と発見と交流の物語」を開催することとなりました。

前近代、航海技術が未発達だったころ、日本及びその周辺で多くの漂流事件が発生しました。漂流の末に我が国ではあまり知られていなかった島に漂着し、日本人の日本周辺の島々に対する認識が深まったり（「地理的理解の深化」）、漂流者が外国に漂着し、救援の手を差し伸べられる中で、国際的な「接触」や「交流」が生まれ、その中で領有権に影響を与える出来事が発生したりすることがありました。

我が国固有の領土である北方四島、竹島及び尖閣諸島についても、その歴史を振り返ると、多くの漂流をめぐるエピソードがあります。また、江戸時代、鳥島や小笠原諸島への日本からの漂流者の漂着が、両島の領有や開拓のきっかけとなっています。

この展示は、内閣官房の委託資料調査事業で収集した資料などを活用しつつ、漂流事件の紹介を通じて、我が国の領土に関する歴史を振り返ろうとするものです。展示にあたっては、歴史上の事件を領土からみた意義のみならず、漂流の経緯をできるだけ詳しく紹介するように心がけました。この展示を通じて、往時の人々の苦難に思いをはせていただければ、幸いに存じます。

最後になりましたが、この展覧会の開催にあたり、ご協力いただきました関係各位に深く感謝を申し上げます。

令和4年3月

領土・主権展示館

※展示中の地図で示した漂流経路は、史料などを参照して可能な範囲で再現を試みたものであり、必ずしも正確なものではありません。

※この企画展の展示は、有識者の助言などを得て作成したものであり、必ずしも政府の見解を表すものではありません。

江戸時代に発展した「弁才船」

江戸時代、社会が安定して経済が発展し、沿岸海運が大いに発達した結果、多くの船が漂流しました。この時代、我が国国内では、弁才船と呼ばれる瀬戸内海で発展した木造帆船が沿岸海運の主役でした。



和磁石（左）本針、正針（右）逆針、裏針
船の科学館所蔵

江戸時代の航海計器と言われた和磁石には、本針と逆針の二種類があります。本針は方位の目盛の順序が向かって右回りに「子（北）、丑、寅、卯（東）、辰、巳、午（南）、未、申、酉（西）、戌、亥」と十二支が刻まれています。逆針は、方位の目盛りの順序が向かって左回りに「子、丑、寅、卯・・・」と十二支が刻まれています。別名、船磁石とも呼ばれ、船の進行方向を知るために、目盛の北南を船の船首と船尾に合わせて固定して使いました。

船舶模型 弁才船
船の科学館所蔵

漂流にいたる過程

（天候が悪化して大風が来る）船は帆を下ろす



（大波によって）舵や外艫（船尾）が破損する



（横波を受けて）船内に水が入る→船員は積み荷を捨てて排水に全力をあげる



船から「たらし」※1を何本も出し、「つかせ走り」※2をして、
日本沿岸から離れないように努力する

※1 碇をつけた綱。 ※2 船の安全をはかるため、帆を下げ、流しながら走ること。

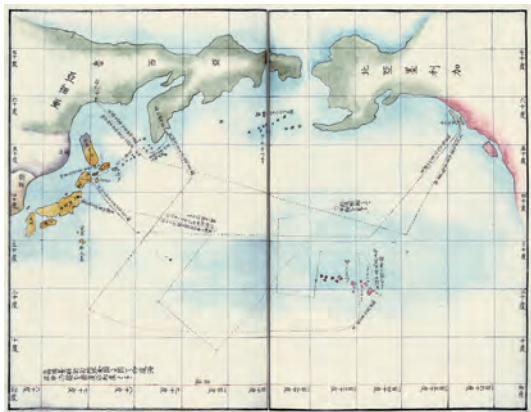


（最後の手段として）帆柱にあたる風で流されるのを恐れ、帆柱を切り倒す

※天候が回復した時、帆走能力が激減してしまうが、当時は最善の方法と考えられていました。帆柱を切り倒さずに積み荷を捨てて助かった場合、「事故を偽装して積み荷を売り払ったのではないか」とお咎めを受けることがありました。

Chapter 1 | 北方四島

江戸時代、松前藩は17世紀初頭から北方四島を自らの領域として認識し、徐々に統治を確立していきました。18世紀、特にその終りごろからロシアとの接触の機会が生じ、1810年代までに、日露両国は、択捉島までが日本領であることの共通認識を醸成していきます。そして、安政元年12月(1855年2月)、日本とロシアは「日魯通好条約」に調印し、当時自然に成立していた択捉島とウルップ島の間の国境をそのまま確認しました。当時の漂流事件から見ても、このような歴史を確認できます。



『時規物語 一』首巻より漂流図〔複製品展示〕
公益財団法人前田育徳会所蔵

加賀藩主前田斉泰の命により、遠藤高環が編纂した漂流記。天保9(1838年)に漂流した越中(現在の富山県)の「長者丸」の生還者4人の供述に基づいて編纂され、完成後、藩主に献上されました。この漂流図では、択捉島までが日本と同じ色で塗られています。地図の左下方に「高橋景保新訂地球全図に因て印度海正中の線を経度の初度とす」とあり、高橋景保の「新訂万国全図」では、択捉島までが日本本土と同じ色で塗られており、これを参考にしたと思われます。



- 1644年「正保国絵図」作成の幕命
 - 1 1660年 伊勢松坂七郎兵衛船の択捉島漂着
1661年
 - 1754年 クナシリ場所の設置
 - 2 1756年 紀州船の択捉島漂着
 - 3 1783年 大黒屋光太夫たちの漂流とロシア滞在
1792年
 - 1798年「大日本恵登呂府」標柱の設置
 - 4 1803年 南部慶祥丸の漂流
1806年
 - 1804年 レザノフ長崎来航
1805年
 - 1806年 文化露寇
1807年
 - 1821年 アレクサンドルI世の勅令
 - 5 1838年 富山長者丸の漂流
1843年
 - 6 1846年 アメリカ捕鯨船ローレンス号の択捉島漂着
1847年
 - 1855年 日魯通好条約
 - 1905年 ポーツマス条約
 - 7 1931年 アメリカのリンドバーグ大佐-太平洋横断飛行で
択捉島と国後島に不時着
 - 1945年 ソ連による北方四島の占領
 - 1952年 サンフランシスコ平和条約発効
- 現在までロシアによる法的根拠のない占拠が継続

ロシアとの接触・国境についての共通認識の醸成

『時規物語 十六』巻之六より第百六十八「蝦夷エトロップ嶋上陸の図」〔複製品展示〕
公益財団法人前田育徳会所蔵

富山長者丸の漂流者を乗せたロシア船プロムイスル号は、厚岸沖を経由した後、天保14年5月23日(1843年6月20日)択捉島振別沖に到着しました。択捉島では、松前藩足軽小林朝五郎らがプロムイスル号を訪れ、夕方に漂流者6人は、択捉島に上陸しました。



キイタフ之門子ムロ場所之図〔複製品展示〕
天理大学図書館所蔵

ラクスマン一行は、冬が近づいていたためエカテリーナ号を根室(子モロ)キイタフ(霧多布)場所の弁天島につけ、乗組員42名は上陸して家建て、8カ月間日本に関する情報交換のほか、蒸し風呂を造ったり、結氷した根室港でスケート(日本初)をしたりしてすごしました。



根室金刀比羅神社の境内からみた根室港の現在の様子

Chapter 2 | 竹 島

竹島の歴史を振り返る際には、鬱陵島が様々な形で登場します。

鬱陵島は、朝鮮王朝初期(15世紀前半)から、倭寇対策を目的に無人島とされました(空島政策)。その結果、日本人が同島に進出するようになります。そのような中、鬱陵島に赴いた日本船が朝鮮国に漂流する事件も起こりますが、朝鮮側から特に抗議は行われませんでした。その後、17世紀末期に両国民が鬱陵島で遭遇し、日朝間で同島への出漁をめぐり外交交渉が行われますが、幕府は、朝鮮との友好関係を尊重するとともに、同島での日本人と朝鮮人の入り混じりを避けるという観点から、当時幕府の許可を得て同島に渡航していた大谷家・村川家の渡航を禁止しました。当時、日朝間で議論の対象になったのは鬱陵島のみであったことや日本人と朝鮮人の入り混じりが懸念されたのは同島だけであったことを踏まえると、竹島は渡航禁止の対象外であったことは明かです。

日本は遅くとも17世紀半ばには、竹島に対する領有権を確立しました。1905年、日本政府は、閣議決定により竹島を島根県に編入し、領有意思を再確認しました。

この章でご紹介する漂流事件を通して、このような経緯を見てみましょう。

- 1 1425年 于山・茂陵島等按撫使金麟雨船の浜田漂着
- 2 1616年
1618年 美保関の馬多三伊の朝鮮漂着
- 3 1617年 大屋(谷)甚吉の鬱陵島漂着
- 1618年 幕府は、大谷家・村川家の鬱陵島渡航を許可。
(1625年)
- 4 1637年 村川市兵衛船の朝鮮蔚山漂着
- 1660年ごろ このころから大谷家・村川家、現在の竹島へも幕府の承認の下で渡航
- 5 1666年 大谷九右衛門船の朝鮮漂着
- 1696年 幕府、大谷家・村川家の鬱陵島渡航を禁止
- 6 1898年 韓国船の「松島沖」遭難
- 1905年 竹島島根県編入
- 7 1908年 竹島丸の「遭難」
- 1952年 韓国による李承晩ラインの設定
- 1952年 サンフランシスコ平和条約発効
- 1954年 韓国による竹島の不法占拠



竹島渡海御免の達書(写)[複製品展示]

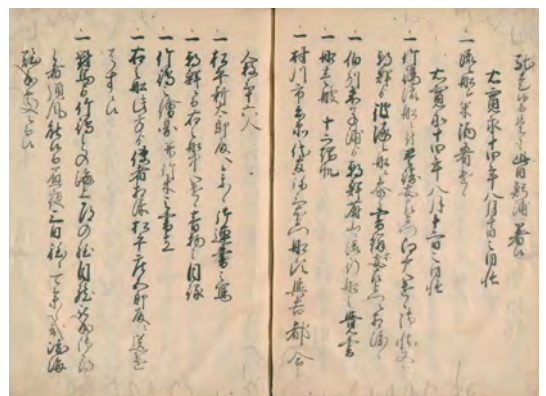
米子市立山陰歴史館所蔵

幕府が米子の町人大谷甚吉、村川市兵衛に竹島(現在の鬱陵島)への渡海を許可した奉書の写し。米子市指定文化財。



重要文化財 朝鮮国礼曹参議李命男書契[複製品展示]
所蔵者:九州国立博物館 撮影者:落合晴彦

朝鮮の礼曹参議(外交の長官)の李命男が対馬藩主宗義成に送付した、朝鮮に漂着した三尾関(美保関)の馬多三伊等を送るから彼等を故郷に帰してやってほしいという手紙。馬多三伊ら7人は、元和4(1618)年に対馬まで送還されました。



対馬藩宗家文書『分類紀事大綱』十四

「日本漂民之一件」寛永14年8月14日之日帳(上)

「日本漂民之一件」寛文6年8月1日条(下)[複製品展示]

国立国会図書館デジタルコレクション

それぞれ、寛永14(1637)年に村川家の船(上図)が、寛文6(1666)年に大谷家の船(下図)が朝鮮に漂着した際、「竹島渡海御免の達書」の写しを携行していたことが記載されており、大谷家・村川家両家の鬱陵島への渡海事業が幕府公認であったことが分かります。

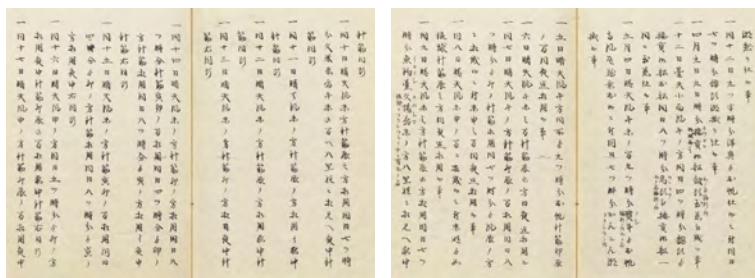
Chapter 3 | 尖閣諸島

19世紀後半まで、尖閣諸島は、どの国にも属さない琉球周辺の無人島でした。その一方で、同諸島は琉球の人々が毎年のように琉球と福州の間を往来する航路の途中にあり、航路標識として活用され、琉球ではよく知られた島々でした。

沖縄県設置後、1889年ごろから、尖閣諸島への漁業者の進出が活発になり、これに対して行政上の管理を及ぼすため、沖縄県は三度、同諸島の沖縄県編入を上申し、1895年に沖縄県編入の閣議決定が行われます。

中国政府は、1895年の尖閣諸島の日本領への編入から、東シナ海に石油埋蔵の可能性が指摘され、尖閣諸島に注目が集まった1970年代に至るまで、実に70年以上もの間、国際的に確立された日本による尖閣諸島の領有に、一切の異議を唱えませんでした。実際、漂流事件に関連して、当時の中華民国も、尖閣諸島を沖縄県の一部として日本の領土と認識していたことがわかります。

以上について漂流事件を通じて見てみましょう。



下田日記〔複製品展示〕
国立公文書館所蔵

寛政7（1795）年に琉球の人々が土佐国に漂着した一件について関連資料を集成したものの。展示は漂流者の一人である石川親雲上が記した部分。寛政6（1794）年3月、泊村（現：那覇）を出帆し、八重山島に貢米^{*1}を受け取りに行った一行はその帰りに暴風雨に遭遇して中国に漂着しました。

その後、琉球館^{*2}のある福州を経由し、同じく宮古島に貢米を受け取りに行った帰りに遭難した一行と合流して那覇に戻ろうとした際、尖閣諸島（魚釣島、久場島、大正島）を望見したと記載されています。

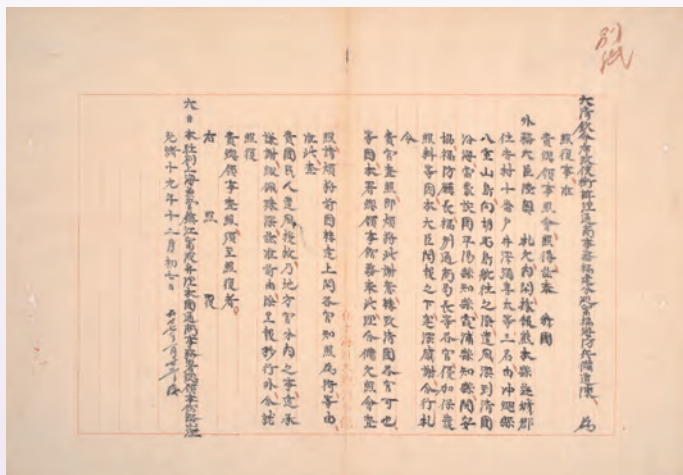
^{*1} 首里王府に収める租税のこと。この時、八重山島で積み込んだ荷物の筆頭には粟が示されている。

^{*2} 福州にある琉球人の滞在施設（中国の駅通制度の機関で、乗込駅が正式名称。その施設の利用が許されたのは琉球のみだったので、琉球館という通称が多用された。）



渡閩航海図〔複製品展示〕
沖縄県立博物館・美術館所蔵

琉球国那覇港と中国福州港の間の航路が描かれた巻物（作成年代不詳）。福州港を出帆した船は、魚釣島―久場島―久米赤島（大正島）―久米島を通過して那覇港に帰港していたことが読み取れます。航路の途中にある尖閣諸島について、尖閣諸島の魚釣島と久場島の間に実際と同じ5つの島が描かれており、琉球人が具体的な知識を獲得していたことが分かります。



別紙〔右照覆〕〔複製品展示〕
外交史料館所蔵

1893年、井澤弥喜太ほか2名は、尖閣諸島へ向かって航海中に暴風に遭遇して中国沿岸に漂着し、清国政府関係者の保護を受けました。当時の外務大臣陸奥宗光は、在上海総領事館に対し、清国側の関係者に感謝の意を表すよう指令しました。左の書簡は、清国地方官の陳氏が在上海日本総領事館の発出した感謝状を受け取り、謝意を関係者に伝達した旨を、光緒19年12月7日（1894年1月13日）付けの書簡で在上海日本総領事館に回答〔右照覆〕したものです。井澤らが「胡馬島」（尖閣諸島）に向かった際に、暴風に遭遇し清国沿海に漂着したことが記されています。

^{*} 胡馬島は「こばしま」若しくは「くばしま」と読みます。

東京から約580km南に位置する伊豆諸島の鳥島、約1,000km南に位置する父島・母島をはじめとする小笠原諸島。

江戸時代初期には伊豆諸島の青ヶ島までの島々には日本人の定住者がいたと考えられますが、これにより南の島々である鳥島や小笠原諸島の島々については、江戸時代に漂着しその後本土に戻ることができた日本人によってその存在が明らかとなり、その後の幕府や明治政府による調査や開拓、ひいては日本の領有につながりました。

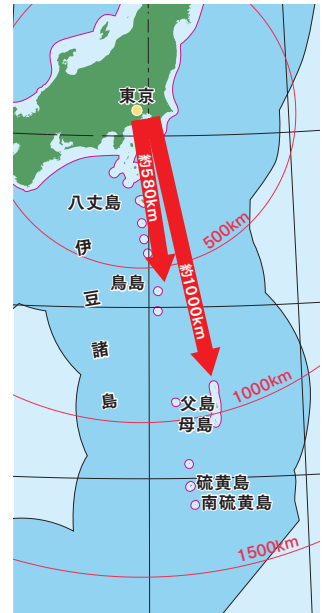


わが国の経済水域の約3割を占める小笠原諸島

日本最東端の島である南鳥島、日本最南端の島である沖ノ鳥島を含む小笠原諸島は、わが国経済水域の約3割を占めています。

小笠原諸島の名前の由来

16世紀末に小笠原貞頼が発見したとされることが名前の由来と推測されますが、その根拠とされる『巽無人島記』の記述は信憑性が疑われています。



宮本元道『小笠原島真景圖』
「酉 12月19日初見小笠原島圖」(上)
「母嶋南手之山上喫午飯圖」(下) [パネル・映像展示]
国立国会図書館所蔵

1861年、小笠原島に派遣された幕府調査団に参加した宮本元道によるもの。幕府の小笠原島調査は1675年に引き続き2度目でしたが、最初の調査のきっかけは漂流です。

- 1639年 オランダ船が父島・母島と思われる島を発見。
- 3 1670年 紀州船の小笠原島*漂着
- 1675年 漂流者の報告を元に、江戸幕府は嶋谷市左衛門を小笠原島に派遣し、調査を行う。
- 18世紀 嶋谷による小笠原島の調査は、ケンペルやシーボルトにより欧米に紹介される。これらの著作やペリーの『日本遠征記』により日本語の「無人島」という呼び名を元にした Bonin Islands という名称が定着する。
- 19世紀
- 1 1785年 (野村)長平らの鳥島漂流
1797年
- 1827年 英国軍艦が小笠原島を英領とすると宣言し、その旨を記載した銅板を島内に設置。しかし、英国政府は正式に承認せず。
- 1830年 欧米人5名などが父島に入植。以後、欧米系の島民が継続的に居住。
- 2 1841年 (中濱)万次郎らの鳥島漂着
- 1853年 ペリーが小笠原島に来航。住民から貯炭地を購入。その後香港に寄港した際に英国が行った照会に対し、同購入は私法上の行為であることを回答。さらに、1675年の日本の調査に言及し、1827年の英国の調査より先行していることを指摘。
- 1861年 幕府・外国奉行水野忠徳らによる小笠原島の再調査。島民に日本領土であること、島民を保護することを呼びかけ同意を得る。1862年6月、駐日の各国代表に小笠原諸島の開拓再開を通告。日本人移民も派遣するが生麦事件の影響などを考慮し、翌1863年一旦退去。
- 1876年 小笠原島の日本による統治を各国に通知。
- 1887年 玉置半右衛門「鳥島拝借並ニ定期船御寄島願」提出。アホウドリ捕獲事業開始。
- 1897年 鳥島の小笠原島附属の閣議決定。1901年に八丈島の附属に改められる。

※「小笠原島」は、現在の小笠原諸島ではなく、父島列島及び母島列島を中心に狭い範囲を指します。

漂流企画展歴史・文化関連施設・スポットリスト

北方領土・竹島・尖閣諸島関連施設

①	北方館・望郷の家	北方領土返還要求運動発祥の地
②	北海道立北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ）	北方領土の歴史や、今の姿、人々の生活などを展示
③	根室市北方領土資料館	戦前の北方四島の島々での衣・食・住を展示
④	別海北方展望塔	国後島や野付半島を一望できる
⑤	北方領土館	北方四島の島々に生息する動物のはく製など展示
⑥	羅臼国後展望塔	北方領土の国後島を一望
⑦	望郷の岬公園	北方領土返還祈念シンボル像・四島のかけ橋
⑧	富山県北方領土史料室	北海道以外、初の自治体の北方領土啓発施設
⑨	竹島資料室	竹島に関する資料収集・研究成果を広く公開
⑩	隠岐の島町竹島資料収集施設 久見竹島歴史館	住民の証言をはじめとした竹島資料収集施設
⑪	石垣市尖閣諸島情報発信センター	尖閣諸島に関する史料や自然環境を紹介

今回の企画展に関連した展示施設

①	北海道博物館	北海道の自然・歴史・文化を知る
②	根室市歴史と自然の資料館	根室市とその周辺の歴史及び自然を知る
③	ウポポイ（民族共生象徴空間）	アイヌ民族の歴史や伝統文化などを知る
④	船の科学館	海と船の文化をテーマにした海洋博物館
⑤	小笠原ビジターセンター	小笠原の自然を中心に、歴史や文化を展示
⑥	米子市立山陰歴史館	米子の民俗資料や米子城の資料などを展示
⑦	浜田市浜田郷土資料館	浜田市の歴史や人々の生活などに関する資料を展示
⑧	大黒屋光太夫記念館	大黒屋光太夫を紹介
⑨	ジョン万次郎資料館	ジョン万次郎の生涯を再現
⑩	長崎歴史文化博物館	長崎の文化と歴史を展示
⑪	松浦史料博物館	平戸藩主松浦家に関する資料を展示
⑫	那覇市歴史博物館	琉球国王尚家関係資料をはじめ、美術工芸品や歴史資料を展示
⑬	沖縄県立博物館・美術館	沖縄の自然、歴史、文化、芸術を知る
⑭	石垣市立八重山博物館	八重山の歴史、文化を知る
⑮	隠岐郷土館	明治期に隠岐島庁として使用された西洋建築を移転復元し、館施設としている

今回の企画展に関連したスポット

①	根室金刀比羅神社・高田屋嘉兵衛像	北海道開拓の先駆者高田屋嘉兵衛が1806年創建
②	根室国後間海底電信線陸揚施設	根室村ハッタラと国後島ケラムイ間を繋ぐ海底ケーブルの陸揚施設の跡
③	根室半島チャン跡群	チャンは、アイヌ民族の砦。祭祀、見張りなど多目的用途に使われていた
④	市杵島神社（弁天島）	高田屋嘉兵衛が大漁を祈って社宇を建立して創祀
⑤	清隆寺のチシマザクラ	旧根室測候所のチシマザクラ。根室におけるサクラの開花宣言の標本木
⑥	漂流者冥福の碑	小笠原島回収・開拓の際に、漂流者の冥福を祈って建てられた碑
⑦	小笠原新治碑	小笠原諸島が日本の領土であることを示すために建てられた石碑
⑧	美保神社	海上交通の関所美保関にある神社。企画展では絵馬をご紹介します
⑨	万次郎少年像	今にも動き出しそうな勢いのある万次郎像
⑩	野村長平の墓	鳥島への漂流から無事帰還した野村長平の墓
⑪	福浦	17世紀、竹島及び鬱陵島へ向かう船の出発港
⑫	焼火神社	日本海の船人に海上安全の神と崇められている
⑬	尖閣列島戦時遭難者死没者慰霊之碑（石垣市内）	戦時、尖閣諸島へ遭難し死没した方々の慰霊碑
⑭	首里城公園	沖縄の歴史・文化を象徴する城
⑮	金石城跡	対馬島主宗氏が享禄元（1528）年に築いた平城

住所や電話番号、URL詳細はこちらをご覧ください。



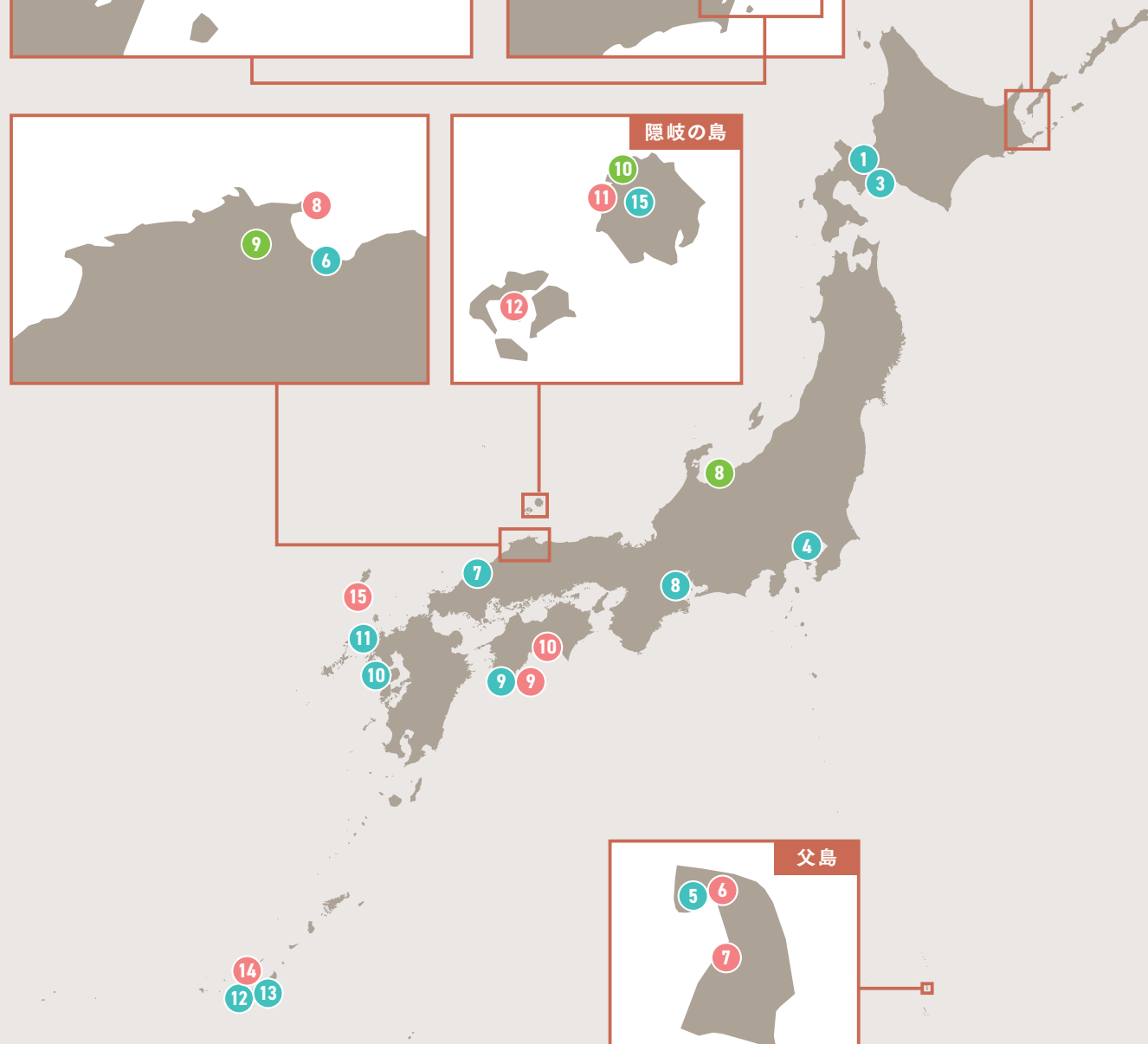
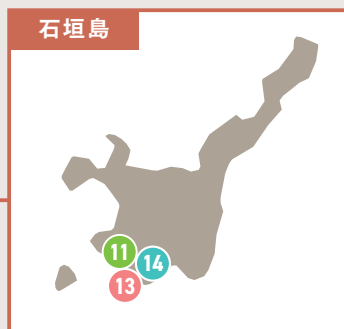
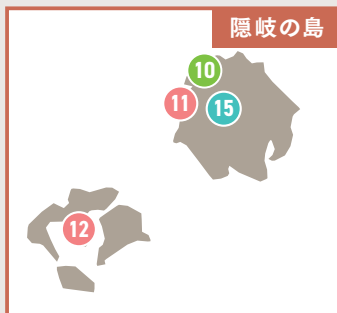
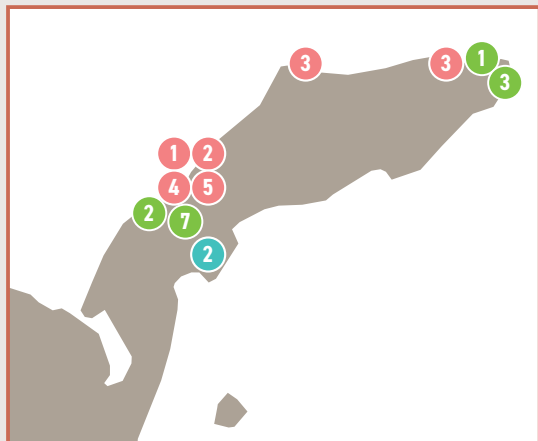
北方領土・竹島・尖閣諸島
関連施設



今回の企画展に
関連した展示施設



今回の企画展に
関連したスポット



もっと知りたい方へ 以下も是非ご覧ください



竹島 研究・解説サイト

https://www.cas.go.jp/jp/ryodo/kenkyu/takeshima/chapter02_section01_movie_01.html



〈解説動画〉江戸時代の竹島と安龍福の供述Part 1、Part 2

https://www.cas.go.jp/jp/ryodo/kenkyu/takeshima/chapter02_section01_movie_01.html



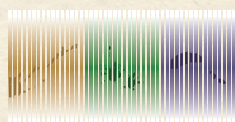
尖閣諸島 研究・解説サイト

<https://www.cas.go.jp/jp/ryodo/kenkyu/senkaku/index.html>



〈解説動画〉前近代の尖閣の海と島 Part1、Part2

https://www.cas.go.jp/jp/ryodo/kenkyu/senkaku/chapter02_section01_movie_01.html



領土・主権展示館

NATIONAL MUSEUM OF
TERRITORY AND SOVEREIGNTY

[所在地] 東京都千代田区霞が関3-8-1 虎の門三井ビルディング1階
[電話番号] 03-6257-3715



@ryodoshuku

Twitterやっています

<https://www.cas.go.jp/jp/ryodo/tenjikan>

